

課題研究② 遊びと学び

『絵本の力』

大阪府・都島桜宮保育園 中嶋 耕平、岩島 愛美、千澤口 裕未、井上 亜矢香、高村 紗耶加

1. はじめに

みなさんは保育の中で『絵本』をどのように使っているだろうか？絵本の力をどのように感じているだろうか？

活動前後の読み聞かせ？行事の意味や由来を伝えるためのアイテム？それとも保育のあそびの提供の中の一つ？園によって、また保育士によっても用途は様々だと思う。

私たち都島桜宮保育園では、今までおもちゃやあそびの提供などについては職員間でたくさん話をしてきた。

三年前、絵本研究家の加藤啓子さんの研修を受けたことがきっかけとなり、絵本は読むもの見るものという固定概念が外れ、保育の中での絵本の存在を一段と強めるものになった。そして、それぞれが絵本をどのように活用しているか？どういった想いで絵本を読んでいるのか？という話し合いを職員間でする中で以下のような絵本の力を再確認することができた。

- ・子どもたちの気持ちの反映、選択する絵本や感想から出る個性、絵本から感じ取る道徳性
- ・自分の知らない世界から広がる興味関心、知識の育成、そこから生まれる集中力
- ・絵やストーリーから膨らむ想像力
- ・感情、愛情、親子のつながり、情緒の安定

今回は、日々の保育を振り返る中で、このような絵本の力が生かされるようにねらいを持って取り組んでいる『絵本と子どもたちとの関わり』について研究・考察を深めていきたい。

2. 感情との出会い

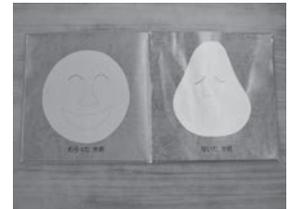
ここでは『子どもたちの気持ちの反映、個性、道徳性』について考えていく。子どもが絵本を読むときに、絵本の場面に応じて子どもの表情が変わっている。では、絵本の絵を見て子どもはその絵に合った感情をどのように捉えているのだろうか？まずは、絵本と感情についての関係性を考えた。

(事例1) 乳児クラス(0、1歳児)で「かお かお どんなかお」という絵本を読む。



絵本の「笑っている絵」を

見て「ニコニコ」、「泣いている絵」を見て「エンエン」などと絵の表情の違いに気づき保育士に伝えている。また、友だちや保育士が笑っていると、一緒に笑顔になって笑い出したり、友だちが泣いている姿を見て「エンエンしている」と気づき、その子に対して元気づけてあげようと頭を撫でている姿が見られた。



乳児クラスの子どもたちに、保育士が絵本を読む時は「笑っているね」「泣いているね」など言葉掛けをしながら読む。それを繰り返すことで、子どもは絵と表情が一致する。その経験を重ねていく中で、友だちの表情や態度を見て、表情の違いに気づくようになっていくのではないかと考えられる。



そのことを踏まえ、幼児クラスでは、絵本の絵を見て保育士が「この子はこういった気持ちだろう？」と問いかけ、こういった返答が返ってくるのかを実践してみた。

(事例2) 5歳児クラスで「ともだち」という絵本を読む。



○「ともだちならいやがることはよそう」という文を読み、絵を見て子どもに「絵の子どもたちはどんな気持ちなのか」を問いかけてみる。



- ・カエルを持って追いかけている子に対しては、「おもしろいと思っている」「このカエルを友だちに見せたいと思っている」「一緒に遊びたいと思っている」と答える。
- ・追いかけている子に対しては、「やめとと思っている」「追いかけてほしくないと思っ

ている」と答える。

その後、このような場面ではどうすれば良いのか問いかける。

- ・カエルを持って追いかけている子に対しては、「カエルを見てと話す」「友だちがやめてと言っていたらすぐにやめて「見てほしい」という自分の気持ちを話す」と答える。
- ・追いかけてられている子に対しては、「やめてと言葉で言う」「追いかけている子話を聞いてあげる」という意見が出た。

このことをみんなで話し合うことで、相手にも感情があるということ、表情やその子が発する言葉で、相手の気持ちを考えることの大切さの話に繋げていくことができる。

- 「ひとりではできないこともともだちとちからをあわせればできる」という文を読み、絵を見て子どもに絵の中に何が描かれているのかを問いかけてみる。



「発表会の絵だ」「オオカミの帽子をかぶせてあげている人がある」「衣装を縫っている人がある」など、絵を見て答えていた。他にも「木を作っている人がある」という子に続き、「木を持っている人がある」という子がいたので、保育士が「何で持っているのかな？」と問うと、しばらく考え、「木を持って（支えて）いないと倒れてしまうからだ!!」ということに気づく。

力を合わせるという考え方に子どもが自ら気づいたので、保育士は「他には一人ではできないけれど、友だちと力を合わせればできることってあるかな？」と問う。すると「友だちのおしゃべり」「マーチング!」「ドミノ倒し」などの答えが出る。保育士は「なんで、ドミノ倒しは一人でもできるのに、友だちと力を合わせればできると思ったの？」と問うと「一人よりも友だちと作った方が、すごいドミノを作ることができたから」と話す。

このことについて話し合うことで、一人よりも二人、二人よりも三人…と友だちがたくさんいることで楽しむことが多くあるということに子ども自らが気づき考えることができる。友だちの存在について考えることで、友だちにも感情があること、友だちに感謝する気持ちなどを知る良い機会となる。また、このように絵を見て感情について子どもたちと考えていく中で、人と人とのつながりの大切さを子どもだけでなく大人も感じる機会になった。



乳児の時は「笑う」「泣く」「怒る」「楽しい」など簡単な自分の感情を感じ、大きくなるにつれ、その感情は相手にもあるということを知っていくことを絵本を通して伝えることができる。また今回の事例2のように絵本の世界にある背景を読み取って、一つひとつの絵に応じた感情を考えることができる。肝心なことは保育士がどう言葉掛けをするのかだ。一つの言葉で子どもの捉え方は変わってくる。世の中には多くの絵本があるが、その絵本一つひとつのページにそれぞれの感情があり、たくさんの感情に出会うことができる。その場面に合った言葉掛けや、その場面を見た子どもから出た言葉を拾い、世界観を広げていけるような保育をしていくことが大切だ。

3. 絵本の種類も様々

ここでは『自分の知らない世界から広がる興味関心、知識の育成、そこから生まれる集中力』について考えていく。絵本というと絵を楽しむものやストーリーを楽しむもの、仕掛けを楽しむものといったものを連想する方が多いのではないだろうか。しかし、昆虫の飼いや野菜の育て方、季節の草花の名前が載っている図鑑や動物の表情が集められた写真集なども絵本の一つであると言える。ここでは、そういった絵本に焦点を当てて、子どもたちとの関わりを紹介していきたい。

(2歳児) 部屋で絵本を見て過ごす時にも、保育士が選ぶ絵本の中に図鑑や写真集も混ぜて出している。動物のいろいろな表情の写真が載っている『みんなのかお』という本を見て、「これなーに？」と保育士に尋ね動物の名前を知ったり、犬や猫、ライオン、ゾウだけでなく、動物って他にもたくさんの種類がいるんだということを知るきっかけとなった。また、「このゴリラさんは怒ってるねー」「こっちはニコニコしてるー」と同じ動物でも表情が違うことにも気づき、真似をして遊んでいる。



(3歳児) 園庭でダンゴムシ探しに夢中な3歳児だが、なかなかうまく見つけることができない。そこで、『ぼく、

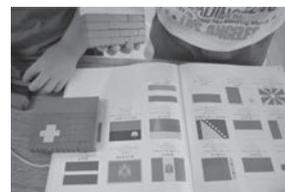
だんごむし』というダンゴムシの生態が書かれた絵本を子どもたちと一緒に見ることにした。「へー、ダンゴムシって葉っぱの下にいてるんや！」「段ボールやコンクリートも食べるの！？」と見ていく中で発見の連続。園庭に出ると葉っぱやコンクリートの下を探してたくさんのダンゴムシを見つけることができるようになった。その後は、その絵本が大好きになり、水の中でも少しの間なら泳ぐことができることも子どもたち自身で発見していた。また、部屋で飼育して観察していく中で、ダンゴムシの赤ちゃんは白いことも発見することができた。



(4歳児) 身近な野菜だけでなく、あまり親しみのない野菜も育ててみようということで、クラスでズッキーニを栽培することにした。多くの子どもが「ズッキーニって何ー？」「聞いたことないー！」と言う中、一人の子どもが「野菜なんやったら、お野菜ノートに書いてあるかもしれないー！見てみよう」と野菜の種類や育て方が書いてある絵本を見ることを提案。そして、実際に見てみると、小さくではあったが載っていたズッキーニを見つけ、「きゅうりみたいな形やなー」「でも、カボチャの仲間やねんてー」と自分たちで様々な気づきを見つけていた。他にも、セミの種類や鳴き声、散歩の道中に咲いている花の名前など、何かわからないことが出てくると『調べてみよう！』と図鑑や絵本のページをめくり探すようになっていた。



(5歳児) 今年の6月に行われたサッカーワールドカップをきっかけに世界の国旗に興味を持った5歳児。「今日はどこの国とどこの国が戦うの？」と保育士に聞いては、『世界の国旗図鑑』を調べて自由画帳に試合が行われる国の国旗を描いて遊んでいた。数日経つと、「今日はブラジルとチリが戦うで」とブラジルとチリの国旗を描いた自由画帳を見せに来てくれるようになった。聞いてみると、朝のニュースや新聞の番組欄を自分で見て、今日の試合に登場する国を自分で調べていたようである。また、興味は国旗だけにとどまらず「この国のおはようってどんな言葉だろう？」と世界の挨拶にも興味が広がり『世界の挨拶辞典』でいろいろな国の挨拶を調べるようになった。このように、5歳児になると図鑑の存在が身近になり、疑問に思ったことや興味を持ったことは「調べれば知ることができる」と自分たちから図鑑を活用することができるようになっている。



以上のように、2歳児では図鑑の存在を知って触れ、3歳児では保育士と一緒に調べて発見し、4歳児では自分たちで調べ、5歳児になると図鑑を活用して、他の事にも興味を広げていくことができた。各年齢の図鑑との関わりを追っていくことで、子どもたちの成長もわかりやすく捉えることができる。しかし、5歳児になったからといってこういったことができるようになるのだろうか？やはり大切なことは乳児期から図鑑や写真集に触れる機会を作っているということではないだろうか。こういった経験の積み重ねによって、『わからないことも調べればわかる』という気持ちに繋がり、小学校以降での学習の動機であるべき『知ることの純粋な楽しさ』といった気持ちに繋がっていくのではないかと考える。

4. 絵本=使い方は無限大！

ここでは『絵やストーリーから膨らむ想像力』について考えていく。

ごっこあそびが盛んになる2、3歳児。あそびの中で経験したことやストーリーからあそびを発展させている。例えば「オオカミと七匹の子ヤギ」の絵本に沿ってオオカミ役と子ヤギ役に分かれたり自分たちで役を決め楽しんでいる。そんなごっこあそびを楽しんでいる中で、

子どもたちが絵本を立てて遊んでいる姿を目にすることがある。保育士として「絵本は見るものだから立てて遊ばないよ」と注意するのか？絵本は見るだけのもの？それとも見るだけでなく、絵本からいろいろなあそびにつながっていくものか？ということに他の職員はどう感じているのかを話し合った。その中でも様々な意見が飛び交った。絵本を破ったり、投げたりと雑に扱わないようにする等、物を大切にすること伝えるのは必要だと思う。そのルールを踏まえた上で例えば「絵本を立ててお家にするの～」と子どもたちがアイデアを膨らませた場合、そこからお家ごっこに発展したりと想像力も深まっていくのではないかと感じている。子どもたちにとって絵本は見るだけでなく、おもちゃの一つとして遊んで楽しめるものでもある。そういった視点で子どもたちのあそびを見てみると、発想や発見に驚かされることがたくさんある。ここでは保育者の一言で変化したあそびの内容を紹介する。

(事例1) 3歳児クラスで絵本で遊んでいた時のこと。経験したことをごっこあそびで表現し、楽しんでいることが多いこの年齢。いつものようにごっこあそびが始まった。

A「今日はどうされましたか？」

B「今日は虫歯ができてしまったみたいで…」

A「それでは口をあけてください」

～歯を見る～

A「はい、もう大丈夫ですよ～治りましたよ～」

ここですぐに次のあそびに切り替わった。このあそびではAが絵本を病院のカルテ代わりにしていたのだ。発想はおもしろいと感じたが、あそびがすぐに進んでしまい、次のあそびに切り替わってしまった。例えばここで保育士が次の患者役になったらどう発展していくのか？終わった今となると言葉掛けや行動で子どもたちのあそびが変化していったのではないかと考えることができる。子どもたちのあそびのアイデアは予想がつかない。その為、その瞬間のあそびが広がったりと言葉掛け一つで変わってくるのだ。

(事例2) 異年齢交流で子どもたちが合同で絵本を見て楽しんでいた時のこと。

都島桜宮保育園では絵本の表紙を目で見て選びやすいように面展台を使用している。



普段はここから絵本を手に取り、1人でじっくり見たり、数名で1冊の絵本を読んだり楽しんでいる、しかし、この日は普段とは異なった。2つ並んでいた面展台の間にAが立つ。

そして左右に面展台を動かしている。



一見動かして遊んでいるだけなのか？そう思ったが、しばらく様子を見てみることにした。

すると

A「はい。電車が出発しまーす」

他の子どもたちも絵本を切符代わりにどんどん絵本を持ってくる。つまり、面展台が電車となり、Aが車掌になり切符をもらっているのだ。そして切符を渡した子どもたちは窓際へどんどん集まる。

次はどうするのか観察してみると、手すりとの間に絵本を入れていくのだ。窓ぎわに飾る絵本の種類は春・夏・秋・冬四季が描かれている絵本など様々だった。保育士が「いろんな景色が見えるね～」と話す「そうそう。次は動物園に行きますよ～」と車掌役の子がアナウンスをしてどんどん絵本=景色が変わっていくのである。そして最後はAの言葉通り、動物の絵本を窓際に持っていく、そこから動物園に変わり、遠足ごっこが始まった。



このように一つの絵本を切符の代わりにしたり、電車の窓に映る景色にしたりと様々な道具に変化する。これも絵本を使っただけのあそびだと思える。今回のように子どもたちのあそびの発想と保育士が言った一言がプラスされ、どんどん想像が膨らみあそびのアイデアも増えていったということが考察できる。

事例1と事例2を比べてみても保育士の言葉掛けや、行動一つでも子どものあそびは変化していく。また子どもたちの発想に気づくか気づかないのかでも状況は一変する。一つの絵本をじっくり見るだけでなく、絵本を使ってごっこあそびに発展することもある。

あそびに発展させていく子どもの『想像力』がさらに広がるように「ここからどんなあそびに発展するのだろうか？」と見守ったり、子どもの言動からさらにあそびが広がるような保育士の行動や言葉掛けも工夫することが

大切だ。

5. 絵本広場の取り組み

ここでは『親子のつながり、情緒の安定』について考えていく。

都島桜宮保育園では、降園時に親子と一緒に絵本を楽しむことができる「えほん広場」を行っている。えほん広場とは何か？と共に開催までの経緯や私たち職員の思いを辿ってみることにする。

平成20年度に夕方の時間に“親子と一緒に絵本を楽しむ場、コミュニケーションの場になってほしい”という目的から絵本コーナーを設けた。



しかし絵本コーナーは幼児クラスの送迎ルートではない場所に設置しているということもあってか、利用者のほとんどが乳児であった。ぜひ幼児にも親子で絵本を読み、コミュニケーションの時間をもってほしいという思いから、どうすればその時間をもってもらえるかを考え、まずは家庭で絵本を楽しんでもらおうと平成21年度より絵本の貸し出しを始めた。回数を重ねるうちに貸し出しを利用する親子が増え、少しずつ絵本が身近なものとなっていった。また私たちも、絵本研究家の加藤さんの研修を受けることで「えほん広場」の存在を知り、「もっとたくさんの親子に絵本を楽しんでもらいたい」との思いから平成24年度より「えほん広場」を始めた。夕方のお迎えの時間に、広場を1階の絵本コーナーではなく幼児の参加も期待し幼児クラスのお迎えの部屋の前にある2階ホールの広いスペースに設けた。絵本は棚の中から背表紙のタイトルだけで選ぶのではなく、子ども自身が選びやすいように「4.」のところで少しふれた「面展台」に表紙イラストが見えるよう並べて設営。そして読み手が絵本を選び、子ども達が静かに座って聞く「読み聞かせ」ではなく、子どもたちが自分で選び見て楽しむ空間とした。

初年度は年数回。利用者は多いものの絵本を見ているのは子どもで、保護者は保護者同士の会話を楽しんでいる状況。職員もまたこの機会に保護者とのコミュニケーションをとりようという意識で参加していた。しかし次年度に向けて「これでよいのか？」と、もう一度職員皆で

えほん広場開催の目的の再確認を行った。職員も意識を変えお便りや連絡ボード等で保護者に伝え回数も増やすことで、今では保護者同士の会話よりも保護者の膝の上に座り絵本を見たり、一人のお父さんの周りにいつの間にか数名の子どもが集まっていたり、子ども同士、異年齢でも一つの絵本を共有する光景がみられるなど、えほん広場本来の姿がみられるようになった。



その中で「ぴょーん」や「ぞうくんのさんぼ」などの絵本を外国語で書かれているものと日本語のものを読み比べをする読み聞かせを、保護者が自ら始めてくれる。見たい子は集まり、「おはよう」という言葉ひとつでも日本語との違いを知り、字を見比べたり、真似たりと外国語にも触れることができている。

また、子育て講演会「えほんを楽しもう!」を開催したことにより「ページをめくっては戻りながら言葉を交わし楽しむ絵本はひとつのコミュニケーションツール」「絵本は“字を読まないといけない”と思っていたが“絵を楽しむ”に意識が変わった」という感想が聞かれ、保護者の絵本に対する意識の変化もみられた。

このように、絵本を保護者にも子どもにも親しんでもらうことで、保育園を卒園してからも絵本に親しむ機会が続いてほしいと思う。幼い頃から絵本に触れることで、将来、教科書や本に対する抵抗心もなくなり、身近に感じられるようになるのではないか。そのことを踏まえた上で今後も絵本広場を開催し親子のつながりを深めていきたい。

6. おわりに

今回の研究・考察を進めていくことで、毎日子どもたちが関わっている『絵本』にはこれだけの力があることを再確認することになった。「はじめに」で挙げた4つの項目だけでなく、他にも、たくさんの絵本の中から今の気持ちに合った一冊を見つける『選ぶ力』や文字習得へのきっかけなど、絵本が広げる世界や子どもたちに与える影響はあげればキリがない。その一つひとつがこれからの人生での『生きる力』や『考える力』に繋がっていくのではないと思う。保育室の絵本にどの絵本を置くのかといった物的環境、絵本の読み聞かせにどの絵本を選ぶのか、また絵本の読み方、子どもたちの声や感性にどう対応するのかといった人的環境の両面をしっかりと考えることが大切になる。無限に広がる『絵本の力』を上手に活用し、子どもたちの心が豊かになるような関わりをこれからも工夫し続けていきたい。

実践奨励賞（課題研究部門）

課題研究②遊びと学び

「絵本の力」

中嶋 耕平、岩島 愛美、千澤口 裕未、井上 亜矢香、高村 紗耶加

（大阪府・都島桜宮保育園）

講評：井桁 容子

普段の保育のなかで活用されている絵本が、どのような形で子どもたちの成長発達や遊びにいかされているかに着目した研究報告です。身近なものから発見や気づきを見出す姿勢が、保育の質を高める動機づけになる可能性を感じさせられました。

たとえば、子どもたちの気持の反映、選択する絵本や感想から見られる個性を上手に受け止め、ダンゴ虫探しに夢中になっている3歳児にたいして、タイムリーに絵本を活用し、探すコツにつなげたり、絵本には描かれていないダンゴ虫の生態に気づくきっかけづくりになるなどの実践は素晴らしいです。絵本コーナーの活用しやすい工夫もなされているので、親子の関わりのひと時に効果が期待でき、さらに、絵本は保育の中でとかく保育者側が“読み聞かせる”姿勢になりがちなところを、多様な活用法に意味を持っていることも大切な視点といえます。よい取組をされているのですが、実践研究であるので主観的な感想にとどまってしまい、内容の論旨が明確に表現しきれなかったことが惜しまれます。

講評：小林 芳文

この研究は、保育の中で、絵本をどのように活用しているか、子どもの成長の上での絵本の力について、仮説としての四つの側面について考えられた興味あるレポートでした。子どもとの関わりで、まず「感情との出会い」についての設定に興味を持ちました。乳児クラスと5歳児クラスの事例を挙げ、「かお」と「ともだち」の絵本を対象に整理されていますので、それぞれのクラスでどのような感情があり、保育士のどのような言葉がけで、どう子どもが変容するのか、そこから保育での絵本の活用のあり方を研究しています。この事に絞ってもう少し細かくレポートしていただけたらさらに良いものになったように思います。「絵本広場の取り組み」の所を中心に、研究レポートを作成されるだけでも、大変重いレポート、保育力アップに向けての意義ある研究になったと思います。

日々行っている既成の保育を見直すという作業は、とても大切なことであるのだが、なかなか思うように取り組めない作業でもある。研修で学んだことを職員間で共有するということは、大変な苦勞があると思うが、都島桜宮保育園では、これまでもおもちゃや遊びの提供について、職員間での話し合いの機会を多く持ってきたとのことで、まずはその取り組みに敬意を表したい。

今回の研究についても、「絵本は読むもの見るもの」といった固定概念を払拭した上で、保育を行う中で、絵本が子どもの成長に与える力について考察している。その過程においても、職員間での話し合いの機会を持ち、絵本の持つ力について、道徳性、知識の育成、集中力、想像力などと定義付けている。そして、日々の保育の中で、これら絵本の持つ力がどのように生かされているかを検証しつつ、保育を振り返っていることが大きなポイントである。絵本は、子どもの国語の力の基礎を育てる重要なツールであるが、「読むもの見るもの」といった使い方だけではなく、如何に子どもの身近なものとして、子どもが絵本と親しむ機会を持てるかということも大切であろう。

絵本のみならず、保育活動の一つ一つを客観的、論理的に検証していくことは、多くの保育所に求められることだと筆者は強く思う。都島桜宮保育園においては、今回の研究事例を参考にして、他の保育活動の検証も行っていただきたいと願うものである。